

この年報の刊行を最後に私は定年退職を迎える。文芸資料研究所とは四十年間関わったことになる。最後に私的な想い出を記すことにした。

勤務して二年目であつたと思うが、所長を兼務していた井本農一学長から呼び出され、業務命令として、国文学科を離れ、研究所の専任となつた。国文学科の業務はそのままであり、仕事が増えた。そのころは少子化が叫ばれる現在とは逆で、定員を度外視して学生を入学させることが文部省の方針であつた。そのため大学も資金が豊富で、上野英子助手（現在の助教相当）が図書予算を一〇〇万円とする増額案を出してきた。その頃の書類は手書きであつたため、一角加えて四〇〇万円に直して提出した。それがそのまま予算として通つてしまい、その後の研究所の図書予算として現在まで続き、多くの貴重書を購入することが可能となつた。信じられないような長閑な時代であつた。

その後、上野氏が専任講師となつたので、私は国文学科に復帰し、研究所は兼務になつた。野村精一所長、渡邊守邦所長から研究所の予算編成を任せられ、上野講師とともに研究所の運営を支えた。野村所長の時代には研究所の古典籍研究の基礎が整つた。渡邊所長は研究所主体で科学研究費補助金（基盤研究A）に挑戦することを主張された。研究所のあり方にこだわられたのである。渡邊所長を代表に、申請書は私が書いたが、採択後に交付された資金の使用はすべて任せられた。渡邊所長の御采配に驚きながら、二〇〇四年に仙台ガーデンパレスのシンクルームをすべて押え、内外の研究者を招聘し、合宿形式で、仙台市博物館を会場に第一回絵入本ワークショップを開催した。それが昨年の韓国ウルサン大学校での第十四回絵入本ワークショップへと繋がっている。このワークショップは学問の世界では重要なインフラと看做されるようになっていく。

順調に発展した研究所もやがていろいろな問題を抱えることとなり、渡邊所長から「人事一新のため自分と一緒に研究所を辞めて

くれ」といわれ、嬉々として承知したが、予定していた教員が所長職を辞退したため、急遽所長に指名されてしまった。所長二期目の最後の年には国文学科の主任を兼務することになり、人間ドックで胃にポリープが大量に見つかったが、幸いなことに良性であつた。

所長退任後は、横井孝所長の古筆収集などの事業に協力した。しかし通常の予算執行業務などからは離れるようにしていた。その間の重要な出来事は国文学研究資料館との業務提携で、これが研究所の将来に大きな影響を与えることとなつた。古筆収集にご理解を示してくださつた井原徹理事長にはいまでも感謝に堪えない。また横井所長が収集した資料をもとに、研究所が主体となつて文部科学省私立大学研究ブランディングに挑戦し、めでたく採択された。客員研究員との連携により、『源氏物語』『若菜下』に見える明石君の装束再現や、高精細デジタル顕微鏡による書籍や古筆切の料紙の非破壊研究などが実現していったことも感慨深い。装束と紙の研究では学会の先頭に立てたと自負している。

河野龍也所長が東京大学に転出し、その後任として図書館長でありながら所長を兼務することとなつた。その間の重要な仕事は、新宮市立佐藤春夫記念館との提携である。これは河野所長の蒔いた種が花開いたものである。さらに複数の自治体・機関との提携も進んでいて、実践女子大学の地域連携に大きく貢献することとなつた。

本号から『年報』もペーパーレスとなり、編集後記を機関リポジトリでは検索して読む人もいないだろうから、在任最後の編集後記には極めて私的なことを記すこととした。御宥恕を乞う次第である。

来年度からは上野英子教授が所長となる。研究所のさらなる飛躍を期待して擲筆することとする。

（文芸資料研究所所長 佐藤恒）